

いた姉が迎えに来てくれました。

これで、おじの方のめいわくをかけずにすむと心がかるくなりました。

兄は、島町試験所に勤め官舎がある、汽車で七時間かかり、官舎に着いたが、食べる物が無い、兄は所長にお願ひして、じゃがいもをもらって来てくれ、しばらく振りで満腹感を感じました。

私と妹は兄と同じ試験所で働くことになり、給料でヤミ米の買出しに出かけたが、知らない人には売ってくれません。父が買ってきたので、お米の有難さを感じみじみと感じました。

兄が結婚し、父は役場の小使をすることで、一里離れた所で暮し、私も母の方から二十分かかるので、自転車を通い、食事を作ることはなくなつたが、父が朝五時に起き、広い広い役場の掃除も大変で、土足の出入ですから、水をまいてはいても、ホコリがまい上り、おさまってから机の上のふきそうじを私が手伝い、自転車で八時半までに試験所へぎりぎりでした。

三年して私も小樽へ来て結婚し、主人の兄弟六人も

おりますが、祖父を見る人がいません、私達が見ることになり、二十五年一緒にいて九十歳で亡くなりました。

三人の子供もそれぞれ結婚し、今は夫と二人の生活でのんびりとテレビの情報を見、少しの島で野菜を作つたりして過ごしております。

引揚げてからの苦勞も大変でしたが今は幸せです。戦争はぜつたいにしないで下さい。

毒草をポケットに入れて

北海道 白鳥 ヨネ

終戦のあとの八月二十日の出来事、雨のしとくと降る朝、遠くで雷でも鳴るようなひびき、沖の方を眺めると砲声の音でした、ソ連の艦隊による砲撃でした。隣村よりの口伝えで避難するようにと、此処に住んでいた人達も、避難しなければなりませんでした。

多蘭泊の沢に避難する事となり、リュックに食糧品

をつめ、救急袋を両肩に、弟妹達と手を取り、叔父、叔母共に皆一緒に避難、途中ソロ／＼と避難する人々。

ある防空壕に身をよせ、その時、叔母より敵の兵隊が来た時、殺されるより自分で死ぬのよと、毒草を戴き、ポケットに入れた時の気持、悲しく、これ程むごいことはない、四十数年過ぎた今日でも忘れることはありません。

戦争に負けた時のむなしさ、悲しさ、書き表わせないくらいです。

解除されたとの知らせで帰ることになり、一たん我が家に行ったが、又も逃げる、その足で麻内村まで歩くことになり、途中老人や病人は道の草原に寝かされて本当にあわれな姿でした、どんな思いで此処に寝せて行くのかと胸の痛む思いでした。

麻内の浜で船に乗り本斗町まで出ることとなり、その船は小さく人が乗るのが精一杯でしたので、持っている荷物は捨てるように言われ持っているのは親子八人でリュック一個と救急袋だけでした。

本斗町に着いた時は町には人が一人もおりませんで

した、皆引揚げて、どこの家も空家でした。

其の夜は漁業組合が置いておりましたのでそこで一泊し、夕飯は玄米を炊いて食べ、翌朝早く最後の引揚船が出航することとで岸壁まで十分程の道のりでした。

途中、何回か飛行機に会い、低空で飛んで来るので音もなく、頭の上まで来て初めて飛行機とわかり、あわてて船の下にもぐったり、又防空壕の中で、頭を上げると屋根のない防空壕であつたり、泣いたり笑つたり、機銃掃射をして行くので弾にあたり死亡した人もおりました。ようやく岸壁に来て、やれ／＼と船に乗れると思つたら、船は石炭を積む箱船でした、発動船で引く、いざ乗ろうとすると又もや機銃掃射を受け生き地獄でした。

男子十四歳以上は引揚げる事が出来ませんので親子の別れ、泣き／＼別れる人もおりました。

船の上では念佛を唱える人、泣く人、それはそれは大変でした。稚内に着くまでは、船には便所がないため、石油缶を利用して用をたし、何時間かかったかし

りませんが、ようやく稚内の港に着くことが出来ましたが、その時は波が荒く岸壁に着くことが出来ませんでした、網で出来ているモッコで荷物と一緒に降ろされました。

稚内の駅では一人一個のカンパンを戴くのが又大変、駅は人で人で人の波、大混乱、やつとの思いで列車に、これまでの間、母は五人の子供を連れて大きなお腹をして大変心配と苦勞をしたと思います。

留萌に着いたのが八月二十三日でした、無事に引揚げて来たものの、引揚げてからの生活苦が待っていたのです。

秋ともなれば、留萌の港町も浜風で寒い日が多く、これからの寒さに向かつて一家七人の生活、それはく大変なこと、間借り生活、食糧難の時代でした。

小さな弟妹も多く、私は十五歳ぐらい農村に稲刈に出ることにしました、出るにしても、とても不安でした、稲を見たこともなく、稲刈など初めてです。

又、親元を離れての生活、淋しいやら、悲しいやら、賃金もなし、働いた分はお米で一日三合ぐらいだった

と思います。

頼まれた家の主人が、着いたとたん、大怪我をして、村のお祭でしたが夕方神社に行った途中、馬にけられて、即入院となり、奥さんも付き添いのため出かけて、即入院となり、心ほそく心配でした。

私一人が残された時、どこに何が有るのか判りませんが、何を食べる米も味噌もどこに有るのか判りませんが、何を食べていいのか、又、ポンプの水の出し方もわからず困りはて、途方にくれて帰ろうかとも思いました、でも此処まで来て帰るわけにも行かず、せつかく頼まれて来ているのにと、思い、唯、ぼんやりと。

その内、本家の方が来て色々教えてくれたので安心しました。夜は泊ってくれて、それから毎日一人でもくくくと働きました、二、三日近所の方々もお手伝いしてくれてどうやら刈入れも終り、奥さんも帰って来てくれて二人でどうやら、ハサ掛け、モミすり、色々の仕事を終える事が出来ました。

私も色々と勉強になりました、約三か月程働きました、もう明日は帰れると云う夜は、嬉しくてく眠れ

ぬま、夜が明ける、朝早く起き、おみやげにお餅を戴き、心は、はずみ本当に子供だと思えます。気持は我が家に飛んでいました。

このような苦勞、今は昔話のようにでも忘れることなく四十数年、私も縁があつて昭和二十八年結婚をし、三人の子供にも恵まれて、主人も定年退職をし、主人の年金で生活しております。今は幸せな生活だと自分ながら思つて居ります。

あのあと父は小さな漁船で父の兄弟と親と密航をして来ました、其の間の毎日、毎夜港を眺めて今日か明日かと待つておりました。

体一つで引揚げたその父も今では何んの補償も戴けずして他界しました、母が生きている中にくらかでもと望んでおりますが、戦争の犠牲とはこんなものでしょうか。

樺太（サハリン）の終戦の思い出

北海道 南 潔

昭和二十年私は恵須取陸送株式会社の自動車運転手として勤めていた。

八月九日夜半突如ソ連は陸、海、空の侵攻を開始した、そのために樺太は大混乱となり恐怖のパニックで、街中右往左往家を捨て家族バラバラ街を後に二十キロ余りの山奥の上恵須取へと避難した。

ソ連機は其の町民避難の長蛇の列へ巡回反復機銃掃射を行い多数の死傷者を出し、国道上は、正に阿鼻叫喚の巷と化した。

私は軍命令で急遽、防衛隊輸送隊員となり其の日から連日連夜避難者の輸送食糧確保の為、街から或は食糧営団の倉庫から東海岸へ通ずる内恵道路を三十キロ余りを隔てた白雲峽へ往つたり来つたりの「ピストン」輸送を行った。